The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パウル・ハッカー著『現代ヒンディー語における若干の助動詞の機能について』(下)
Author(s)	Hacker, Paul; 溝上, 富夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1975, 33, p. 97-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パウル・ハッカー著『現代ヒンディー語における若干の助動詞の機能について』

（下）

溝　上　富　夫（訳註）

PAUL HACKER: Zur Funktion einiger Hilfsverben im modernen Hindi

（3）

übersetzt und erläutert von **Tomio MIZOKAMI**

X. calnā

84. *calnā* は文法書には助動詞としては記されない。これはおそらく，これまでの文法が十九世紀以来の観察—それを脱するのは困難である—にほとんど完全に依存しているということと関係があるのだろう。最近二，三十年の間にやっと，*calnā* は助動詞として用いられはじめ，あるいは少なくとも，今日もはや看過し得ないほどにまで頻繁に用いられるようになったと思われる。

Hindī Śabdasāgar は動詞 *calnā* の意味を的確に述べている。つまり，*calnā* の場合はある一つの動き（*gati*），一方 *jānā* はある場所（*sthān*）に主眼点が向けられているという。例えば，過去形において *calnā* は行為の完成（*samāpti*）すなわち到達を表わすことがないのに対し，*jānā* はこの意味をもち得るとされる。この観察から，*calnā* 合成語と *jānā* 結合とのちがいが明らかとなる。自動詞と *jānā* の合成語が（独立の *jānā* も又，つねに「到達」を含んではいないように）決して状態の完結を強調しない（§30以下で出来事それ自体をみた）のに対して，*calnā* はその不完結，積極的に表現すれば進行性に力点をおくのである。PREMCAND から *calnā* の語幹との結合例をきわめてわずかしかかきとめなかったが，彼の世代には，明らかにこの使用はごくまれにしか現れなかったということだ（今日でも，ごくたまにしか出会わないいくつかの——本論文では考察しない——助動詞と動詞の構造がある）。例：

itnī der mẹ āndhī kā veg kuch kam ho calā thā (*Sevāsadan* 70頁)「そのうちに嵐の激しさは徐々におさまった」

ここでは，すでに *itnī der mẹ* によって，緩和の不断の進展が表わされているが，動詞 *ho calā* はこの要素を強調するのである。翻訳では「徐々に」とか「次第に」が相当する。Premcand からもう一つの例：

sāṛiyā phaḷ calī thī,（同上33頁）「サリーは次第に破れ出していた」

85．今日の文学では，とくに *ho calā* が極度に頻繁に見出される。この結合はしばしば，単に *ho gayā* 表現の異形として用いられることがある。例えば JAINENDRA KUMĀR の次の二つの文例：

viyog us (=*chāyāvād*) *ke liye māṇ̣ ek Cult* (*iṣṭ*) *hī ho gayā, āsū māṇ̣ chipāne kī cīz nahī, sajāne kī vastu ho calā* (*Sāhitya kā śreya aur preya*. 152頁)「それ（Chāyāvāda）にとっては，別離はあたかも一つの崇拝されるもののようになった。涙はあたかも隠すものでなくみがく（美化する）べきものとなった」

ここでも又，他の場合のように *ho calnā* と *ho jānā* の区別がほとんど認められないことが時折ある。しかし大ていは，今日では *calnā* の合成語には，なお「次第に」「きわめて徐々に」の一つの進行的発展の意味が含まれているといってよかろう。これが特別頻繁にみられるのは，1930年に初版の出た RĀMCANDRA ŚUKLA の著書 *Hindī Sāhitya kā Itihās*. である。これから二つの例文を拾うと（449頁と534頁）：

自動詞と：

naī śiksā ke prabhāv se logṇ̣ kī vicārdhārā badal calī thī「新しい教育（新しい教養の内容）の影響を受けて次第に人々の考え方は変ったのだ」

他動詞と：

apnī bhāṣā kī prakṛti kī pahcān na rahne ke kāraṇ kuch log us kā svarūp bhī bigāṛ cale haī「自分の言語の本性（精神といってもよかろう）を正しく認識していないために，ある人々はその姿をもすでにそこないはじめているのだ」

この経過がまだ終っていないことは，ドイツ語では „schon anfangen"（すでにそこない始めている）をつけ加えることによって表現することができる。しかし又，話し手が誤りと考えている行為の表現に *calnā* が用いられるとき，*calnā* は *jānā* と似たようなニュアンスを表わしているということも有り得よう（§42参照）。その場合，この助動詞の意味はおよそこのように解釈できよう。つまり，主語が進行中の現象によって，一つの誤った道へとそれるという風に動かされる。次の例文では確かに，「誤りの」行為という上に示した意味で *caluā* が使われることが非常に明白である（この文章は1936年に書かれた RĀMCANDRA VARMĀ の *Urdū-Hindī Kos* [Bambai ⁴1953] 14頁の序文にみられるものである）：

sab log apne apne ḍhaṅg se aur manmāne taur par jo kuch jī mę ātā hai, vah sab Hindī ke nām se likh calte haī「誰もが自己流に随意に心に浮かぶことを何でもヒンディー語の名で書くことをそそられる」（又は，書いてヒンディー語と称する）

一般に，助動詞としての *calnā* の使用は，明らかにしばしば個人的に条件ずけられている。確かに *calnā* の使用は発展中である。まず，個々の作家の個人的な言語慣用をとらえることがこの

場合，研究にとって不可欠だろう。多数の作家達から集められる資料についての判断は，この場合容易に誤った方向へと導くであろう故，私は上の観察に限っておこう。

XI. pānā

86. 大ていの文法は助動詞としての *pānā*（「得る」）を変形不定詞との結合（その場合「…する許可を得る」という意味である）の場合のみ説いており，語幹との結合の場合（「可能」を意味する）は述べていない。私が目を通した文法書のうち，TH. PAHWA. *The Pucca Munshi*（242頁）のみが，後者の用法を挙げている。十九世紀にはこの結合はまだ普通ではなかったのかもしれない。*Hindī Śabdasāgar* はこの二つの結合をこう見分けている。つまり，語幹と結ばれる *pānā* は彼の説明によれば，「完成する能力」（*samāpti kī śakyatā*）を意味するという。この観察は私には誤っていないと思われる。しかし，もう一つ他の要素をつけ加えることができる。そのもとの意味に応じて，*pānā* は外部の事情がその行為を許す，又は否定の場合は許さないということを暗示する（PAHWA の „chance“ という定義はほとんど当っていない）。従って，*pānā* は「…する可能性又は機会を手に入れる」という意味である。

このことから PAHWA や *Śabdasāgar* の述べていない一つの事情が容易に説明される。つまり，それが現れる圧倒的に多くの場合，*pānā* は否定されたり又は条件ずけられている。行為又は現象が外部の諸条件に妨害されずに起ることができると感じる場合よりも，むしろ外部の状況がある行為又は現象を許さないあるいはそれらによって遂行又は経過が制限ずけられている場合の方が，外部の状況について考えるのは当然のことである。それで，否定の *pānā* は「欲してはいるができない」ことを示すことができ，又，ある行為又はある現象が目的を達することができないことを暗示することができる。この場合，Śabdasāgar の述べていること（*samāpti kī śakyatā*）は正しい。

87. PREMCAND から私は *pānā* の語幹との結合のケースをほんの少しだけ書きとめた。次の文では *pānā* はまだほとんど独立の動詞である：

> *kahī tum muihe mil jāte, maī tumhę pakaṛ pātī ...*（*Sevāsadan* 260頁）「どこかであなたに会えば，あなたをつかまえることができたら…」（つまり，私があなたをつかまえて，手に入れることができるなら）

PREMCAND の次の章句は，すなわち意図された現象が正しく行われるという状況を妨害するという *pānā* の特徴的な意味要素にとって，きわめて教訓的である。

> *Sādhu : pahle to Gajādhar Pāṇḍe thā, ab Gajānand hū.*
>
> *Umānāth : Oho ! tabhī to maī* pahcān na pātā thā. *mujhe smaraṇ hotā thā ki maīne kahī Āp ko dekhā hai, par Āp ko is bheṣ mę dekhkaṛ mujhe baṛā āścarya ho rahā hai ...*（同

上161頁）

Sādhu： 以前は Gajādhar Pāṇḍe でしたが，今は Gajānand です。

Umānāth： おや，そうですか。だから私は貴方が誰だか分らなかったのです。どこかで貴方にお会いした気がしますが，貴方がこの身なりをしておられるのをみて大層驚いているところです（つまり， Sādhu の身なりで私がお目にかかったのが，貴方であり得るとは私は考えなかっただろう）。

88. *pānā* のこの用例は今日の書きことばと話しことばにおいて非常に頻繁に現れるようになった。例：

A．否定の *pānā*(最初の二文は新聞から，その次の四文は Gītā Press の宗教論文からとった)：

a) *kāryakram kī jānkārī logo ko śāyad ek din pahle tak nahi ho pāti* 「人々は計画について知るのは，おそらくようやく一日前のことだろう」

b) *ve samucit sāmagrī bhī ekatra nahi kar pāte, itnā kam samay diyā jātā hai* 「これほど短い期間しか与えられていないので，彼らは必要な材料を集める機会もない」

c) *Prabhu se hamāre hṛday kā yah sayog sthāyī nahi ho pātā* (*Satsaṅg-sudhā* 6 頁)「神との私達の心のこの一致は永続しえません（＝状況のため永続きする可能性がない)」

d) *adhīratā kī chāyā bhī man ko na chū pāve*（同上 8 頁）「焦りの陰も，心に触れる（機会を得る）ことができない」

e) *ham adhikāś aise hai jo un ke ādeś ko sun nahi pāte*（同上56頁）「私達の大半は，彼（＝神）の命令がきけない」

f) *apnī jitnī śakti hai, sab kharc kar dete hai ; phir bhī duḥkho se mukt nahi ho pāte*（同上22頁）「私達は自分のもっている力を全部費しますが，それでも苦しみから免れることができません」

a—dの例文は明らかに， *pānā* の「…する機会を手に入れる」という本来的な意味を示しており，一方eとfについては，主語に，妨げを受けた状態が存在し，同時にその行為又は現象が意図されているか，もともと起るべきものであることが強調されている。この場合 pānā は sak-nā「できる」のより意味の強い異形にすぎない。すなわち「できる」という意味である。

B．条件の *pānā*：

kisī vastu ko khokar hī ham us kā mūlya jān pāte hai「何かあるものを失ってはじめて，私達はその価値を知る機会を見出すのです」

pahle ham svayą is halcal se hatę ... tabhī ham svayą śubh se jur pāęge (*Satsaṅg-sudhā* 164 頁）「まず私達は自分でこの動揺をなくさねばなりません…そうしてこそはじめて，私達自身吉（＝幸福）によって結ばれるようになる機会が見出されるでしょう」

C．肯定の *pānā*：

... *un (kahāniyo) ke zor se thoṛā kuch jī pāyā* ... (*Sāhitya ka śreya aur preya* 12頁)「それらの助けによって，少し生存の可能性を私は見出した」（すなわち，私の短篇小説は，私に一つのささやかな物質的な生存の土台をあてがってくれた）

この例では，*pānā* のもとの意味がなお，きわめてはっきりしているのに対し，同じく JAINENDRA KUMĀR からとった次の二つの文例では，pānā は「(…する)力がある」「できる」の意味をもつ。

bhed me vah abhed dekh pātā hai (*Pūrvoday* 158頁)「彼は差異性の中に同一性をみることができる（又はそれを理解する)」

is ātmayuddh, dharmayuddh, kā citra Premcandji sajīv banā pāte hai (*Sāhitya ka śreya aur preya* 107頁)「この魂の争い，正義の闘いを，Premcand 氏は生き生きと描写することができるのです」

例文で示されるのは，*pānā* が肯定に使われると，主語がその行為をすることができる，能力があることを意味するだけでなく，主語がその能力を実際に実行もすることを意味する。これが *pānā* と *saknā* の主要なちがいである。*saknā* はただ能力だけを示すのであって，実行は決して示さない（PAHWA, *The Pucca Munshi* 252頁。§247参照）からである。状況又は能力が誰かにある行為をすることを許す，又は許したという意味で，ある行為をすることが「できる」又は「できた」という表現には，以前はただ効果的関心を示す lenā（§27.参照）が使われることができただけである（PAHWA 上述の箇所参照)。最も新しい言語発展が肯定の *pānā* に，することが「できる」又は「できた」という意の一つのより明白な表現をつくり出したと思えるのだ。

XII. 総括的，結論的論評

89. *calnā* と *pānā* によって，主動詞に進行性又は行為達成可能の概念がつけ加えられる。前者は相を示す助動詞，後者は話法の助動詞として分類することができる。この論文で扱った他の八つの助動詞はいずれも，これまで「強調」といわれてきたグループの一部を成すものである。これらの助動詞はいずれも，それ自体すでに主動詞に含まれている意味要素を単にとり出し，明白にし，展開させるのに用いることができることを観察してきた。すなわち，*denā* の場合は他動詞性の概念，*lenā* の場合は再帰性又はもっとも広い意味での「中間態」の概念，自動詞と結ばれる *jānā* の場合は経過の概念である。他動詞につく *jānā* によって，ある種の動詞にそれ自身固有の（もっとも広い意味で）距離の概念が強調され，*paṛnā* によって（単に慣用的なものであるとか，又は *jānā* と同じ意味でない限り）下降と偶然性の概念が，そして *uṭhnā* によって一つの上昇（大ていは比喩的である）の概念が強められる。*ānā* は自動詞又は他動詞につく *jānā* の，ある意味で，再帰的意味をもつ異形にすぎない。*ḍālnā* は暴力性の概念を拡大し，*baiṭhnā* は損失とか攻撃性の概念を展開させる。その展開が八つの助動詞の主要な機能である。これらの

助動詞が動詞表現をより限定的に，より一層くっきりさせるということは，その展開が，明らかにすること，より正確に表現することの単に一つの帰結にすぎない。従って，これらの助動詞——§1で分類したグループの四番目のもの——を Explikativa と名ずけるのは妥当と思える。それらによって形ずくられる複合動詞は確言形といえる。Explikativa はさらに，それ自身主動詞の意味に存在しない要素を，動詞の意味につけ加えるのに役立つ。しかしその場合，それらは，大てい，その機能において一義的ではない。例えば，*denā* にあっては開始の概念（*cal denà*）又は事実と見かけの間の対照（§10 の *bol denā*）のそれ，*lenā* の場合，主語の関わり，又は自発性，*jānā* の場合は完成性又は，浅薄性又は全くの誤りの概念，*ḍālnā* の場合，不適当性又は「大きいこと」の概念，*baiṭhnā* の場合，遺憾又は大胆さの概念等，がそうだといえる。ときどき動詞表現に，これらと反対の概念を加える助動詞は，状況又は語の脈絡による。逆に助動詞が使用される場合は，もろもろの状況又は観念群がしばしばより正確に表現され，それらに存在する諸要素をより拡大して表現していると思えるのである。従っていえることは，ある助動詞は，主動詞の意味に含まれたものをとり出さない場合でも，ある拡大された機能をもちろん行使するのみならず，付随的表現と共に働く場合にも作用するのである。すなわち，付随的表現だけでなく，又助動詞だけでもなく，双方共に重なり合って補い合い，拡大され，時々ことばとして表現され，一つの規定された，ある状況又は観念連合に固有の性格である。従ってこのような場合，展開され，明白にされるのは，主動詞の意味要素ではなく，一つの観念連合全体に包括されている要素である。

90. ヒンディー語の助動詞の機能と，他のインドゲルマン諸語の動詞に加えられた諸要素（接頭辞，前置詞それに副詞）との正しい比較を時折行った。もちろん，多くの場合，これらの付加要素はヒンディー語の Explikativa の場合よりもずっと一義的であり特殊的である。確かにヒンディー語には，このような付加要素と結ばれる他の言語の動詞と全く対応する，接続分詞と定動詞との結合があるが[1]，しかし Explikativa はこれとは別の種類である。Explikativa は動詞概念又は観念全体を拡大するだけである。しかしこの場合も又，とくに後者の機能に対して，他の言語のある種の接頭辞その他の用法において類似が存在する。例えば，*pī jānā* の *jānā* はドイツ語の *austrinken* の *aus* に対応する。ドイツ語の動詞合成においても又，*aus* の追加は動詞

1. 例えば，*kah sunānā*「よんできかせる，述べる」，*haṭā phęknā*「投げすてる」，*khịc lāna*「引きぬく，引きよせる」，*nikal bhagna*「逃げ去る」。しかしこれらの結合にあっては，独立詞で表現された行為は他の動詞のそれと同時に起っている。他の場合には二つの行為があって，それらが相前後し同じ意図でなされるということによってのみ一つの単位として用いられる。例えば *ukhaṛ phekna*「根こそぎにする（そして投げすてる）」。これらの結合のいくつかには，他の場合には Explikativa として働く動詞も又，一つの語幹形と共に現れることがある。それらは本論文でしらべた確言形と表面上は同じである。しかしそういう結合においては定動詞は助動詞ではなくて，その意味を完全に保っている。例：*ja baiṭhna*「行くそして座る」，utar ānā「降りるそして来る」＝「降りて来る」，他の多くの例は§34と§43を参照。

の意味に事実上の何もつけ加えないし，aus によって表現された動詞概念の変化は，それと一致する状況の場合，前置詞がなくても単一語だけで表現され得よう。しかし，助動詞が単に，すでに主動詞に存在するものを明白にするにすぎない場合，これら助動詞の機能は（とくに，*denā* それに自動詞と *jānā*, *paṛnā* の場合），他の言語の接頭辞等よりもずっと一般的である——もっとも，翻訳にあたっては，このような助動詞の役割を接頭辞，前置詞又は副詞によっておきかえる努力がしばしばなされなくてはならないが。ただ *lenā*，他動詞と結ばれる *jānā* と *ānā*, *uṭhnā*, *ḍālnā*, *baiṭhnā* 等においては *paṛnā* も又，それらの動詞概念を説明するという機能においては，動詞に加えられるドイツ語のいくつかの接頭辞，前置詞，副詞とほゞ同じように特殊的なものである。もちろん，一つの助動詞がある一定の接頭辞等と同等に扱われることはめったにない。ただ *uṭhnā* の場合のみは，ドイツ語で同じ意味の er- と auf に対応するある範囲の場合にはそうである。

91. *denā*, *jānā* そして部分的に *paṛnā* が動詞概念に与える規定の固有の共通性を *hī* の意味の共通性と上で（§13）比較した。そして，それほど一般的な機能をもつ助動詞の使用が我々にとっておびただしく思えるという事実を*hī*による終局性の重複表現と，同時に他の表現手段とを比較した。ところでなお外の，ヒンディー語の文体の特徴——ヒンディー語一般のであって，単にそれを話すある個人の言葉のではなく——があって，重複という同じ印象を与える。しかしよく注視してみると，それらも又，おびただしいのではなく，ヒンディー語にとってとくに特徴的な表現の傾向，詳細に輪郭を与える話し方の傾向によるのである。この傾向は，あらゆる話の部分の使用に効果が現れる。*hī* について述べられたことは，副詞の領域からの一例である。動詞の場合にそれに対応するのは，Explikativa だけでなく，時制，法，相を示す形式類の極度に豊富な（助動詞によって可能とされた）発展もである。名詞と動詞との「副詞的」（他の動詞にある種の限定を加える）用法の領域から，私が我々には重複と思われる表現性の例としてなお述べてみたいのは：

ある種の，精神的現象を述べる場合，精神的能力を示す語が極度に頻繁につけ加えられている（例えば *vah* man mẹ *bahut jhuṭ jhlāyā*「彼は心が不気嫌だった」; *vah* man mẹ... *par lajjit thā*「彼は心の中で…について恥しかった」; *us ke* dil mẹ *ḳhayāl hotā hai*「彼は心にこう思う」——における「心に」という語の付加は我々にはおびただしく過度のように思える）ということ。非常によく，ほとんど規則的に「情緒」「感情」「まなざし」等というような語がつけ加えられているということ（例：ヒンディー語それ自身で可能な言いまわし，「彼は怒って言った」又は「怒りをもって」の代りに，「彼は怒りの気持をもって言った」*us ne ros ke* bhāv se〔単なる *roṣ se* 又は *roṣ ke sāth* の代りに〕*kahā* という表現が好まれる）。ひじょうにしばしば，情緒の基礎づけに際して，独立詞によって，情緒を刺激することが如何にして知られるようになったかが示されるということ，つまり見る，きく，読む等によって。（例：抽象的に「貴方はそのことをとて

もお喜びになられるでしょう」という代りに「貴方がそれをご覧になるととてもお喜びになるでしょう」 *Āp ko* yah dekhkar *asīm ānand hogā* といわれる。「それは彼にとって慰みとなろう」の代りに，慰みが言葉に存在すれば，「彼はこれをきけば慰みとなろう」 yah sunkar *use ḍhāṛhas ho jāegā.* といわれる)

92. 贅語法を用いる傾向は助動詞の機能を知るのに，この論文でつねに用いてきたところの一つの重要な方法論的な手助けを提供してくれる。この傾向はここでは二つの方法で効果が現れる。第一は，助動詞が動詞からひき出す同じニュアンスはしばしば副詞によって補足的に表わされているということ。第二に，夫々の助動詞は，意味の上からひじょうに近く，そのことから，助動詞が明白にしょうとしていることが，動詞がこのようなグループと意味において共通性をもっているひとと正確に符合するか，あるいは又，この共通性が助動詞の機能と密接に関連しているということが除外され得るような一定のグループの動詞に，優勢に現れるということである。

XIII. 文体手段としての助動詞

93. Explikativa の動詞は，ある範囲では論理的にはなくてすむものである——もっともそれらがある場合は，ない場合といく分異ることが述べられているが。それらが使用されるに関しては，話し手の判断に広くかかっている。それらは文体手段である。

助動詞に適用される純粋に文章論的諸規則は，すぐに述べることができる。しかし，助動詞の本質はそれらの諸規則では認識できないし，ましてやよくあるように，その扱いが辞書に委ねられているということによっては認識できない。何故なら，しばしば，助動詞の機能が非常に一般的なため，動詞助動詞の結合のもつ意味が正しく言い換えることができないという理由で，助動詞の機能の把握が拒まれるのである。助動詞についての理論はむしろヒンディー語の一般的な文体論，つまり文章論的現象の応用に関する理論たるべきである。最初に解明されなければならないのは，どの関係において，どの目的のため，どの表現意図でもって，文章論的現象が使われるかということ，そしてこれらの用法の法則を，可能な限り深り出すことである。それはいわゆる低次の文体論である。本論文の前の章で，このことについていくらかかいてみた。その際，とくによるところが大きかったのは，型と法則であって，諸材料の完全な記載ではなかった。はじめての試みによって遺漏のないこと，又は終局的なことが与えられるということはあり得ない。助動詞の文体機能の本質により深く入りこむためには，特別の使用体系，狭い意味での文体の研究もなされたならば，はじめて効果的だろう。個々の作家の言語慣用が研究されなければならないだろうし，又，ある表現方法において助動詞がどのように現れるかが観察されなければならないだろう。それについて次に若干の指示を与えたい。それの前提はまずさしあたって，助動詞のより低次の応用体系の展望が得られたということである。さらに進んだ特別の研究は，助動詞の使

用が他の文章論的現象とどのように関連しているかを明らかにすることでなければならないだろう。例えば，いつどの程度までExplikativaが否定文に現れ得るか，いつどの程度までExplikativaが動詞の不定形において現われるか等が研究されなければならないだろう。このような問題にはここで余り入りこむことはできない。

94. 助動詞は動詞表現をある意味でより限定的に，より拡大的に形成するものであるから，それらは，動詞だけによる場合よりも，個々の現象の個性に，より決定的に人々の注目を向けさせる。つまり，個々の出来事が語り手と聞き手にとって注目すべきなのである。それは当然，さまざまな様式におけるさまざまな表現様式において起る。

会話では，個々の行為又は個々の出来事が言語として表現されるときに，まさにこの現象が伝達されるのであるから，注目すべきものにみえると思われるだろう。そこでしばしば，特に動詞の意味が，個々の助動詞について上に説明したようなやり方でそれを招くというときに，助動詞表現が選ばれるのである（例えば，使役の場合の *denā*，何らかの点で主語が関っている場合の *lenā*，出来事を表わす動詞の場合と距離の他動詞の場合の *jānā*，「損失」を意味する動詞につく *baiṭhnā* 等）。例えば，誰かが来たかどうかという問に対しては，つねに *ā gayā* という肯定の答が発せられよう。だから，出来事を説明する助動詞と共に。又，私に誰かが何かを与えたという伝達はいつも *de diyā* という形をとるだろう。従って他動詞性を明白化する助動詞と共に。

否定は通常，ある現象の展開された，はっきりした観念を排除する。従って上にあげた問に対する否定の答はつねに，助動詞をとらずに *nahi̇ āyā* である。否定に Explikativa が現れる場合は，それらはある肯定の副次的意味をもつ。たとえば断定の意味がそれである（PAHWA. *The Pucca Munshi* 245頁参照）。

連続した物語では，個々の動詞はその出来事と関係をもつ一連のできごとのうちの一つの部分のみを述べる。個々の行為はそれ自体として眺められていない。それ故この場合は Explikativa の助動詞を欠いている——もちろん，単一語といく分相違する意味を動詞に与える（*ho jānā, rah jānā, mār ḍālnā* の如き）ようなものを例外として。しかし，素材として与えられたあるパラグラフの後，ある生起関係の終にあっては，物語の場合でも助動詞は頻繁に現れる。すなわち，最後の行為又は最後の状況が，いわば個々の一連の出来事の結果として，よりきわ立って注目を向けさせるのである。逆にいえることは，ある物語において助動詞とくに Explikativa が現れるとき，小さな休止があって，個々の現象が一連の出来事から少し強調されるということである。

95. 例は PREMCAND の小説と短篇小説——PREMCAND の才能は主に物語作家としてのそれであった——から沢山見出される。小説 *Sevāsadan* (Sarasvati Press, Banaras, 発行年不明）から一箇所を引き合いに出させて頂きたい，二十章（119頁以下）の始めに Subhadrā, が自分の失った腕輪をどのようにさがすかが語られる：

Subhadrā ko sandhyā ke samay kaṅgan·kī yād āī. *lapkī huī snānghar mẹ* gaī. *use ḳhūb yād thā ki us ne yahḭ tāk par rakh diyā thā, lekin us kā vahḭ̄ patā na thā. is par vah* ghabrāī. *apne kamre ke pratyek tāk aur ālmārī ko* dekhā, *rasoī ke kamre mẹ jākar cārọ or* ḍhūṛhā. *ghabrāhaḭ aur bhī* baṛhī. *phir to us ne ek-ek sandūk, ek-ek konā chān mārā, mānọ koī sūī ḍhūṛh rahī hai, lekin kuch patā na* calā. *mahrī se* pūchā *to us ne beṭe kī qasam khākar* kahā, *maḭ nahḭ* jāntī. *Jītan ko bulākar* pūchā, *vah* bolā, *mālkin, buṛhāpe mẹ yah dāġ mat* lagāo. *sārī umir bhale bhale ādmiyọ kī cākrī hī mẹ* kaṭī hai, *lekin kabhī nīyat nahḭ* bigāṛī, *ab kitne din jīnā hai ki nīyat bad* karḭ̄gā. *Subhadrā hatāś ho gaī, ab kis se* pūche? *jī na* mānā, *phir sandūk, kapṛọ kī gaṭhriyḭ̄ ādi khol-kholkar* dekhḭ. *āṭe dāl kī hāṛiyḭ̄ bhī na* choṛī, *pānī ke maṭkọ mẹ hāth ḍāl-ḍālkar* ṭaṭolā. *ant mẹ nirāś hokar cārpāī par leṭ gaī.*

ここでは，二十以上の Explikativa を欠いた一連の動詞表現が，ただ *rakh diyā thā, chān mārā,* そして *ho gaī* によって休止させられており[1]，それから *leṭ gaī* によって終止させられている。これらの助動詞結合の最初のものは *ḳhūb yād thā* の使用によって生じさせられており，ここで使われた限定性の副詞表現（*ḳhūb*）が Explikativa の動詞の確言形 rakh diyā thā を生ぜしめている（§16.参照）。この形は同時に，すぐ次々と重なっている出来事の長いつながりの中の一つの小休止である。行為者はここで一瞬，考えこむ。休止のところに現れる他の二つの Explikativa はそれらの単一語によって代用できない——何故なら，Explikativa は単一語と意味がちがっているからである（*chān mārā* における *mārnā* は助動詞として使われている。それは本論文でとり扱っていない。その意味は *chān ḍālnā* と同じである。§63の三つ目の例文参照。*ho jānā*「なる」は *honā*「である」といく分異なる）。これら二つの Explikativa は一連の出来事の本来的な休止を明らかにするものではないのに対し，*leṭ gaī* は休止の最後の出来事を述べる。まわりに急いでやって来た後，行為者は絶望して下に横たわるのである。それは彼女の行為の結末であって，当然 Explikativa で述べられている。

96. 習慣的に起る事が描写される場合にも又，助動詞の少ないいいまわしが普通である。*Sevāsadan* の五十一章（315頁）の始めのところで，Suman と Śāntā 姉妹の生活の仕方が述べられている：

nityaprati prātaḥkāl is jhopṛe se do tāre nikalte haḭ *aur jākar Gaṅgā mẹ* ḍūb jāte haḭ. *un mẹ se ek bahut divya aur drutgāmī hai, dūsrā madhyam aur mand. ek nadī mẹ* thiraktā hai, nāctā hai, *dūsrā apne vṛtt se bāhar nahḭ* nikaltā. *prabhāt kī sunahrī kiraṇọ mẹ in tāṛọ kā prakāś mand nahḭ hotā, ve aur bhī* jagmagā uṭhte haḭ.

1. 単に状態を述べる，不定の動詞形式はここでは，以下同様考慮しない。又，相を示す *ḍhūṛh rahī hai* も考慮しない。

ここでは，一つの Explikativum が二度現れている。つまり最初は *ḍūb jāte haị* であり，次に来る文章の状態描写によって，語ることが中断される。第二は *jagmagā uḷhte haị* であり，これはすでに現象の考察である。余り助動詞使わないが，しかしある休止点でつねに Expliktiva 合成語によって中断されるところの，姉妹の生活習慣の描写は，さらにずっと丸一頁続くのである。

97．助動詞を用いない文体は，それ自身，即物性客観性をもっている。語り手は彼がその出来彼事についてどう考えるかを語るのでもなく，又彼の人となりをその上に反映させるのでもない。は個々の行為や現象を単に物のようにすえるだけである。それ故学問的又は実用的な論文とか叙述体の文体も又，助動詞の乏しいものである。何故ならこの場合も，筆者又は語り手は主に客体に注目するのであり，客観的であろうとするのだから。論文的そして叙述的文体と物語的文体との相違はここでは観察しない。というのは Explikativa の助動詞の使用にとって決定的なことは，これらすべての表現方法——物語，描写，論文，叙述が客観的であろうとしていることである。後者の例については挙げなくてよかろう。何故なら，学問的なヒンディー語のテクストのどの頁にもそれらが豊富に載っているから。

98．これまでに挙げた表現方法と反対に，助動詞が豊富に現れる文体は考察したことを表現する文体である。この場合も又，行為，現象，状態が言葉に表わされるが，しかしそれらはそれらの関係する推移の客観性又は，それらの具体的存在の総体においてすえられるのみならず，それらがすえられると同時に，時々個々に，ある意味を含むものとして綿密に直感され，観察される，のである。それ故この場合，助動詞によって明らかにされることは，その行為は一つの行為であって，出来事は一つの出来事であって，一つの動詞概念がどの状況においてももっている特殊性が表現として拡大されるということである。

ドイツ語では，完了形等は過去の個別の出来事を確定し，その輪郭を注視させながら，一連の出来事から個別の出来事を目立たせる働きをする。それは，少なくとも過去時制においては，Explikativa の助動詞が果すところのものに類似したものである。それ故，しばしば，ある複合動詞は，ドイツ語では完了形で訳さなくてはならない。例（*Sevāsadan* 251頁）：

> *yahā̃ logọ ko aṅgrezī jaisī samunnat bhāṣā* mil gayi, *sab usī ke hāthọ* bik gaye「ここの人々は英語の如き洗錬された言葉を得た（*bekommen haben*）と同時に自分自身を（英語に）売った（*uerkauft haben*）」

ここでは語られているのではなく，二つの事実が熟慮の価値あるものとして注目されている——もっともそれらは各々個々に偶然に同時発生している。何故なら，一方は他方と同じように熟慮に値するから。

99．助動詞が全くないというパラグラフも，又すべての動詞が Explikativa と組み合わされて

いるというパラグラフも現れないだろう。前者は不自然に抽象的であり，余りにも即物的にきこえるだろうし，後者は過度の正確さ故に衒学的である。確かに，変化の原則から，客観的な文体においても Explikativa がなお一層用いられよう。一連の出来事において，ある終結点のところで，最後の出来事が好んで助動詞によって示されることをみた。しかし，どの物語も，語り手又は彼によって述べられた人物が，個々の行為又は状態を孤立して眺め，又はそれについて熟慮するという箇所をも含んでいる。 *Sevāsadan* からの例：

二十七章の終りのところで（170頁），Kṛṣṇacandra は彼の拘留に従うことを説明する。そこでは各出来事は個々のものとして眺められる。純粋に状態を述べる場合（単に「である」という動詞）の外に，又否定の場合以外に，一連の文章において，すべての動詞が助動詞と組み合わされている。ドイツ語ではどこでも，完了に相当する。ヒンディー語では *hai* が二度つけ加えられているだけだ。

abhī maiṃ āpe mẹ nahī hū̃, is kaṭhin yantraṇā ne mujhe pāgal kar diyā hai. *us ne merī ātmā ko* pis ḍālā hai. *maiṃ ātmāhīn manuṣya hū̃. us narak mẹ parkar yadi devatā bhī rākṣas* ho jāẹ *to āscarya nahī. mujh mẹ itnī sāmarthyā̃ kahā̃ thī ki mai itne bhārī bojh ko* samhāltā. *tum ne mujhe* ubār diyā, *merī nāv pār* lagā dī, *yah śobhā nahī* detā *ki tumhāre ūpar itne bare kārya kā bhār rakhkar maiṃ ālasī bana baiṭhā rahū̃.*

同小説の四十章（246頁）で，ある話し手が神智協会の活動の成功ぶりを注目させる。それらは，各々自己目的的に考えられる一連の意味のある事実である。それ故，相次いで現れる五つの動詞表現がすべて，助動詞によって（そのうち四つは Explikativa である）組み立てられている。

hamāre hī samāi ke udyog kā phal hai ki āj Amerikā, Jarmanī, Rūs ityādi deśo mẹ Āp ko Rām aur Kṛṣṇa ke bhakt aur Gītā, Upaniṣad ādi sadgranthọ ke premī dikhāī dene lage hai. *hamāre samāj ne Hindū jāti kā gaurav* baṛhā diyā hai, *us ke mahattva ko prasārit* kar diyā hai *aur use us uccāsān par* biṭhā diyā hai *jise vah apnī akarmaṇyatā ke kāraṇ kaī śatābdiyọ se* choṛ baiṭhī thī.

100. 常に個々の現象が孤立的に眺められ，特別の方法で意味があるとみられる，あることばのあやは，比較である。従って比較においては，Explikativa の使用――相を示す助動詞と話法の助動詞の場合と同様――がとくに適切である。*Sevāsadan* からの例（五十一章，315頁，§96であげた箇所のすぐ前のところ）：

jaise sundar bhāv ke samāveś se kavitā mẹ jān paṛ jātī hai *aur sundar raṅgọ se citrọ mẹ, usī prakār donọ bahnọ ke āne se jhopṛe mẹ jān* ā gaī hai. *andhī ā̃khọ mẹ putliyā̃* paṛ gaī hai. *murjhāyī huī kalī Sāntā ab khilkar anupam śobhā* dikhā rahī hai. *sukhī huī nadī* umaṛ paṛī hai. *jaise jeṭh baisākh kī tapan kī mārī huī gāy sāvan mẹ* nikhar jātī hai *aur khetọ mẹ kilolẹ* karne lagtī hai, *usī prakār virah kī satāī huī ramaṇī ab* nikhar gaī hai,

prem mẹ magn hai.

101. これまで我々は，主に物語風のある文体の中での，助動詞の多い語法と少ない語法との変移を眺めてきた。しかし又，その文体が物語風でもなく論文風でもなく描写風でもなく，観察的であることのために助動詞がつねに頻繁に現れるテクストもある。これには，たとえば，いくらかの宗教上の論文と，一つの哲学的小説といってよい BHAGAVATĪCARAṆ VARMĀ の *Citralekhā* が属する。例として Gītā Press 発行の *Satsaṅg-sudhā* (Gorakhpur, saṃvat 2009) 集の5頁以下の祈り（*Prārthanā*）に関するある観察のはじめをとり上げよう。

jis samay hamāre cāraṇ or vipatti ke bādal maṇḍrāne lagte haị, *andhakār* chā jātā hai, *koi sāthī nahị rahtā, path dikhānevālā bhī koi nahị hotā, us samay — yadi hamāre andar thoṛī bhī āstikatā rahtī hai to ham barbas Bhagavān kī or muṛkar* pukār uṭhte haị „*Nāth! rakṣā* karo, *path* dikhāo.“ *tathā ham mẹ se bahutẹ kā yah anubhav hai ki pukār lagāte hī aise vicitra ḍhaṅg se hamārī rakṣā* ho jātī hai *ki jis kī kalpanā tak nahị* ho saktī. *aisā kyẹ hotā hai? isīliye ki Bhagavān apne sampūrṇ jñān, anant sāmarthya, anant sauhārd ko liye nitya hamāre sāth haị, un se hṛday kā saṃyog hote hī un kī sampūrṇ śakti hamārī āvaśyakatā pūrṇ karne ke liye prakaṭ* ho jātī hai. *jahā̃ un kī aprameya śakti, aparisīm sauhārd ko vyakt hone kā avasar* milā *ki kāle bādal* bikhar gaye, *nirmal prakāś* chā gayā, *bhār* har lenevāle *sāthī* ā pahụce, *suvistīrṇ niṣkaṇṭak path* dīkh gayā *tathā kṛtajñatāpūrṇ hṛday se Prabhu ke caraṇẹ mẹ sir navākar ham gantavya kī or* cal paṛe. *kintu Prabhu se hamāre hṛday kā yah saṃyog sthāyī nahị* ho pātā, *is ksaṇ ke bād hamārā jīvan Bhagavt-prārthanāmay nahị* ban jātā. *anukūl paristhiti āte hī ham Prabhu ko* bhūlne lagte haị; „*Prabhu kī prārthanā aisī adbhut camatkār kī vastu hai*“ *yah smṛti bhī ham dhīre-dhīre* kho baiṭhte haị.

これは物語風又は描写風文体と極端な反対をなすものである。ほとんどすべての動詞が助動詞と組み合わされている。これらがもともと Explikativa に属さない場合でも，それらは動詞表現にその都度，特別の重みを加える，そして全くの事実関係の文体では大てい，不用であるだろう。この場合，出来事が言葉として用いられれば，個々についてどの場合も自己目的的に観察するためだけである。動詞「である」(*honā, rahnā*) の形式を見渡すと，ただ三つの動詞だけが助動詞と組み合わさっていない。つまり *karo, dikhā, milā* である。最初の二つについては，無気力な人々の祈りがはっきりした形を使うことができずに，助動詞のない表現のそっけない形式だけを使うことができるということが容易に説明できる。*milā* は，いくつかの結果へ導き，それからそれ自身重要なものとして位置をしめさせるところの単なる推量と考えられている。

102. 前節で引用した*Satsaṅg-sudhā* の箇所の文体のように終始一貫して観察的な，そしてそ

れ故，助動詞の豊富な文体は，しかし比較的稀れである。BH. C. VARMA の *Citralekhā* では，概して作家 PREMCAND の作品よりも，相当助動詞がよく使われている。しかし，ここでつねに重要なのは，語られた諸現象である。さらに，小説の人物の話の中において，論文又は叙述文，又教訓の性格をもつ箇所が現れるときには，助動詞がとくに支配的に現れるのではない。しかし，自分が観察するための小休止——そこで，ある行為又は現象の輪郭が助動詞によってえがかれる——はひじように頻繁である。一方ではしばしば一連の出来事において，夫々の出来事の後毎に，このような休止がおかれることがあり，他方では又助動詞によって個性化され，そして考察又は注目の対照として言明される一連の行為又は経過の前提又は対照として，唯一つの行為だけが，客観的な，助動詞なしの表現で表現されることがある。又ときどき，ある現象が助動詞なくして，結果が述べられることもある。人は個々の所与を押しつけられることができないけれども——一般に助動詞は反照的意図なく用いられる——，一般にいえることは，Explikativa で表わされているということ，又二つ以上の出来事においては，より意味のある部分が Expliktiva で示されるということ，又，Explikativa が相対的に頻繁に現れることで，著者は単に語ったり，描写するだけでなく，又観察もしていることが示唆されるということである。十六章(BH. C. VARMA. *Citralekhā*, 10版. Prayāg, saṃvat 2009, 136頁以下）の最初から無作為に一つの例を抽出すると：

kuch aise vyaktitva hote haị jo dūsrọ ko apnī or ākarṣit kar lete haị, *jo dūsre vyaktitva ko ākarṣit karke us ko* dabā dete haị *aur us ko apnā dās* banā lete haị. *Citralekhā kā vyaktitva bhī aisā hī thā. yadyapi Citralekhā apnī is ākarṣaṇ-śakti se bhalī bhāṭi paricit na thī, par anjāne mẹ hī vah us kā prayog* kartī thī, *aur Kumāragiri apne ko* rok na sakā. *Kumāragiri kī kuṭī mẹ Kumāragiri aur Citralekhā kā sāth huā. Kumāragiri Citralekhā se dūr* haṭnā cāhtā, *par vah sadā apne ko Citralekhā ke nikaị* pātā thā, *is par use āścarya hotā thā. Citralekhā Kumāragiri ke sāth usī kī kuṭī mẹ* rahne lagī. *jis samay Kumāragiri dhyān lagākar* baiṭhtā thā, *Citralekhā kuṭī mẹ* ā jātī thī *aur vah ek gṛhiṇī kī bhāṭī kuṭī kā prabandh* kartī thī. *par Kumāragiri dhyānāvasthit na* rah saktā thā, *us ke netra* khul jāte the, *aur vah ek ksaṇ ke lie Citralekhā ko* dekh *avaśya* letā thā. *dūsre hī ksaṇ vah apnī āṇkhẹ phir band* kar letā thā, *vah prayatna* kartā thā *ki vah phir se dhyānāvasthit* ho jāe, *par yah us ke lie asambhav thā.*

aur Citralekhā ! *vah Kumāragiri kī kuṭī mẹ* gai thī *Kumāragiri se prem karne — par kuṭī mẹ pahuṭckar us kī bhāvanā* badal gai, *vah sādhanā tathā tapasyā ko* sīkhnā cāhtī thī — *vah Kumāragiri ke mārg mẹ bādhā na* pahụcānā cāhtī thī.

us din dīpak jal cukā thā, *aur rātri do prahar* bīt cukī thī. *Kumāragiri ke dhyān-magn hone kā samay* ā gayā thā, *ve apne āsan par* baiṭh gaye. *Kumāragiri ne netra band* kiye, *par ve dhyānmagn na* ho sake. *Citralekhā ne jab* dekhā *ki Kumāragiri dhyānāvasthit* ho gaye, *vah kuṭī mẹ* ā gaī *aur apne āsan par* baiṭh gaī.

103. 今あげたテクストの部分では，言いまわしは概して助動詞が豊富であるが Explikativa を使う動詞表現が，Explikativa のない動詞表現と交互にあらわれる。ここでさらに同じ小説のある頁をとって眺めてみたい——そこにはさまざまな休止のところで，さまざまに Explikativa が頻繁に現れており，しかも内容の種類に依存している。その際，Explikativa と Explikativa でない動詞の言いまわし間の区別をさらに明らかにする観察が生れよう。*Citralekhā* の27頁の最初の休止は，Explikativa でない。何故なら休止はもっぱら，その後つゞき，作者にとって重要で考慮しそして考慮されるに値すると思われるものに対して仮定を記述するだけであるから。付加されるものは次の通り：

isī samay Bījagupta ne pīche se hąste hue kahā : „*Brahmacārī! āj tumhę nartakī ne dīkṣā* dī hai, *is ke upalakṣya mę maiṇ Citralekhā ko badhāī* detā hū.“

それから，八つの Explikativa の連続がつづき，たゞ三つの単一語によって中断される：

Śvetāṅk moh-nidrā se ekāek caụk uṭhā. *Bījagupta kī hąsī ne us kī bhūl kā ābhās* kar diyā. *us ne Citralekhā kī or* dekhā *aur phir Bījagupta kī or. is ke bād us ne mastak nīcā* kar liyā. *Bījagupta hąstā huā vastra badalne* calā gayā. *Bījagupta ke jāne ke bād Śvetāṅk ne Citralekhā se* kahā : „*Devi! āj tum ne merī sādhanā cūr-cūr* kar dī. *tum ne yah kyǫ* kiyā? *tum ne mere hṛday mę ek jvālā prajvalit* kar dī hai. *kisliye? Devi, mere jīvan mę tum bavaṇḍar bankar ekāek kyǫ* ā paṛī?“ *itnā kahte-kahte Śvetāṅk ne Citralekhā kā hāth zor se* pakaṛ liyā.

ここのすべて——彼が伝達と質問として Citralekhā について述べる彼の反応の個々の内容と同じく，Śvetāṅk について起っていること，又彼のすることも作者にとっては意味があり，熟慮に値するのである。何故なら，Śvetāṅk について起ったのは，一つの重要な変化であり，ここで話されていることの内容はすべてその変化のしるしなのだから。三つの単一語によって明らかにされ得ることは，*dekhā* が単に，先行の文における説明のつづきを示唆しているだけであり，重要度は先行文より少ない。*kahā* は Śvetāṅk が話すということよりも彼が言う内容の方が重要であるから，単一語である。*kiyā* はそれ自体，限定されないようなものをもつところの一つの問題に最終的に存在している。

次につづく休止は，先行の文との強い対比として，助動詞の使用に関して存在する。（単に状態を示す動詞を考慮外におくと）七つの Explikativa のない定動詞，ただ二つの Explikativa と並んで，他のある助動詞（*saknā*）との二つの結合が現れた：

Citralekhā ne hąste hue uttar diyā : „*Śvetāṅk, tum bhūl* karte ho. *jise tum sādhanā* kahte ho, *vah ātmā kā hanan hai. maiṇ ne tumhę keval itnā* dikhlāyā hai *ki mādakatā jīvan kā pradhān aṅg hai. rahī tumhāre hṛday mę jvālā utpanna karne kī bāt, maiṇ ne to tumhę keval jīvan kā vāstāvik mahattva* dikhlāyā hai.“ *Citralekhā ekāek gambhīr* ho gayī. *us ne Śvetāṅk kā hāth* bhaṭak diyā : „*Śvetāṅk, yah yād rakhnā ki tumhāre jīvan mę merā ānā*

asambhav hai. sab kuch hote hue bhī maṇ apnī manovṛtti jāntī hū̃. *maṇ sąsār mę keval ek manuṣya se prem* karṭī hū̃ *aur vah Bījagupta hai. kabhī is bāt kī kalpanā tak na karnā ki maṇ tumhāre jīvan mę* ā saktī hū̃. *ab tum* jā sakte ho."

前に述べた「嵐」や「炎」との鋭い対照において，彼女が Śvetāṅk の本質を完全に変えてしまったことは，冷静な事実である。だから，Explikativa を欠いているのだが，又その理由は，ここでは命令の文体が支配的であるからでもある。Explikativa はここでは，命令が話しによって中断される場合のみ——単に，話ではなく同時に，語られることを意味ある，重要なこととして注目させる二つの文章において——ことばとして示されて現れている。それから，二つの短い文章が追加され（27/28頁）——ただ最初と最後の現象だけが，Explikativa で示され，その両者間に，助動詞を欠いた七つの定動詞の連続が現れる。

Śvetāṅk kā mukh pīlā paṛ gayā. *vah ek nartakī se* hārā — *jñān mę, kartavya mę aur vyaktitva mę. us ne* kahā : *„jo ājñā Devī !" aur itnā kahkar apamānit tathā vijit brahmacārī dvār kī or* baṛhā. *Citralekhā ne kuch* socā *aur kuch* samjhā. *dvār ke bāhar gaye Śvetāṅk ko us ne* pukārā : *„Śvetāṅk !* ṭhahro, *tum se kuch aur kahnā hai, yahā̃* lauṭ āo !"

最初にここで報告されている現象はまだおだやかにかつ，著しく重要なこととして *pīlā paṛ gayā* が Explikativ でおかれる。次に来るのは——論理的でも因果的でもなく文体的に——それのいわば連続である。しかしここに助動詞のない七つの定動詞が現れているということには，ある特別の理由がある。Śvetāṅk は酔いから，運命的な酔いざめへと落ちたのだ。彼はぼんやりしていると同時に当惑している。彼自身は出来事を，重要なものとして，はっきりした輪郭において体得しないので，ただ起ったことを放任するのみである。それはある意味で，抽象的な感情である。その感情は著者にとってふさわしいし，著者はいくつかの文章を相前後して抽象的な，助動詞を欠いた文体でかくことによって，まさしくより印象的にその感情を作るのである。ただ，最後の Citralekhā の叫びにおける命令だけは，再び Explikativa で与えられる。

104. Explikativa のない語法は従って，主語の比較的不注意によってなされた，又はこうむった行為又は状態を説明するのに用いることができる。それは，ろうばい，放心，あわての気持に一致する。

この認識は，§95 に引用した *Sevāsadan* の箇所の文体を理解するのに，一つの手助けをもたらす。そこにおいて，Explikativa のない動詞表現が異常なまでに長いということは，行為者 Subhadrā も又，一種当惑の状態にいるということと，疑いもなく関わりがある。さて腕輪がどこにあるかという考えが彼女の思念を満たす。彼女がそれを見出すためにすることは全部，それ自身どちらでも構わないことであり，個々の行為としてはっきりとは体験されない。そこで非常に抽象的な文体となるのだ。*Citralekhā* からさらに二箇所を引いて今まで述べたことの確証ができる。16頁から，Śvetāṅk がいかにして，認めうる感情の動きがなくして，Bījagupta の命

令を実行し，Citralekhā に一つのリキュールを届けるかが述べられる。最初 Bijagupta は彼にリキュールを与え，それから彼がそれを Citralekhā に届ける。これら二つの行為は，BH. C. VARMĀ には普通のように，助動詞 denā によって，はっきりと輪郭がとられ，そして考えて併置されているのである。

Bījagupta ne sugandhit madirā se bharā huā svarṇ-pātra Śvetāṅk ke hāth mẹ de diyā.

Śvetāṅk ne madirā kā pātra Citralekhā ki or baṛhā diyā.

さらに九頁に，同じ行為がもう一度現れる。しかしここでは Śvetāṅk は動揺しているのであり，強い感情の動きにとらわれているのである。Citralekhā のある言葉が彼を驚かした *cakit ho gayā* のである。彼は，個々の現象を，彼自身のために正確に体得することができないのである。だからここでは，助動詞をとらないのだ：

itnā kahkar us ne Citralekhā ke sāmne madirā kā pyālā baṛhāyā.

Druckfehlerverzeichnis

「上」（学報26号）の正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
32	19	役立つ	用いられる	43	20	関係代名詞の	再帰代名詞と
34	15	すぐれた文学作品	文学作品	44	10	換言すれば	又は
38	20	作る	する	45	11	再帰形容詞で	再帰形容詞によって
38	29	無選択	無作為	45	12	と示される。	として示される。
39	9	存在するということ	存在するにちがいないということ	47	9	自主性等	自発性等
39	25	使役のしるしが暗示する	使役の表示で暗示される	49	22	はまらないのだ。	はまらない部分もある。
39	30	作る	する	50	27	人が欲するならば	そう解釈しようとすれば
39	32	ここには，行為の作用性という解釈が存在する	ここで問題となるのは，行為の作用性の明白化である	51	21	無選択	無作為
				52	2	通常	時折
40	6	denā のなす説明	denā のなす明白化	59	23	叙格	斜格
40	6	限定である（そして	限定である。そして	60	18	彼は	彼に
40	7	—— 396	（ 396	62	17	説明した	「明白化」として用いられる
40	8	との解釈は，	のは	62	28	役立つ	用いられる
42	14	確実性	限定	64	9	いる。	いる（§50参照）。
43	8	よって正確な	よって，より正確な	64	24	危饉	飢饉

Paul Hacker について

1913年1月6日，ケルン近郊に生まれる。1949年以来，ボン大学並びにミュンスター大学講師。1954年から55年まで，インド・ビハール州ダルバンガーにあるミティラ研究所教授。1955年よりボン大学教授。1963年，ミュンスター大学インド学の初代教授に就任。インド哲学，とくにシャンカラ，プラーナ，マヌ法典．を専門とするが，ヒンディー語にも造詣が深い。数多い著書，論文のうち，本論文以外の代表的なものは次の通りである。

„Upadeshasāhasri von Meister Shankara.“（シャンカラ作 Upadeshasāhari. サンスクリット原典からの訳註）Bonn 1949

„Untersuchungen über Texte des frühen Advaitavāda, 1. Die Schüler Śankaras.“（初期一元論の文献研究，1.シャンカラの弟子達 Mainz, 1950）

„Eigentümlichkeiten der Lehre und Terminologie Śaṅkaras.“（シャンカラの教義と術語の特質）（Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft 100/1950）

„Vivarta. Studien zur Geschichte der illusionistischen Kosmologie und Erkenntnistheorie der Inder.“（仮現：インド人の幻影主義的宇宙論史と認識論史の研究）（Akademie Meinz, Abhandlungen geistes und sozialwissenschaftliche Klasse, 1953年第5号）

„Prahlāda. Werden und Wandlungen einer Idealgestalt. Beiträge zur Geschichte des Hinduismus.“（プラフラーダ：ある理想像の成立と変遷 Akademie Meinz, Abhandlungen geistes und sozialwissenschaftliche Klasse, 1959年第9号及び第13号）

„Die Seinsbegriffe des Hindi: hotā hai und hai.“（ヒンディー語の存在概念 hotā hai と hai, Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der Indogermanischen Sprachen 78/1963）

„On the Problems of a method for treating the compound and conjunct Verbs in Hindi“ (Bulletin of the School of Oriental and African Studies, London 1961年24巻)

„Einiges zur Hindi-Grammatik.“（ヒンディー語文法に関する若干の考察）（Indo-Iranian Journal 1963年6巻）